瀬戸内海の室津半島のつけ根部分に拓けた港町・柳井市は、日本でも有数の日照時間を誇る地域。江戸時代に商都として賑わった柳井市街には今なお往時の面影を残す白壁の町並みがあり、歴史の流れを感じることができる。そんな柳井を代表する祭りが「柳井金魚ちょうちん祭り」。白壁を赤く染める金魚ちょうちんはどのようにこの町に根付いたのだろう。

特集 ゆらゆら ゆらゆら、提灯の旅

白壁の町を泳ぐ金魚ちょうちんに魅せられて

山口県東部に位置する港町・柳井市は、県を代表する民芸品「金魚ちょうちん」の産地。
そんな金魚ちょうちんの文化を支える方々と出会い、地域の在り方に触れる。

亡き夫の遺志を継ぎ
工房から伝統を紡ぐ

一度は途絶えた金魚ちょうちんを復活させた河村信男さん。
妻の政枝さんはその意志を受け継ぎ、工房を切り盛りする。

金魚ちょうちんが柳井で生まれたのは江戸時代。柳井の商人が青森のねぶたをヒントに、考案したといわれている。当時お迎え提灯だった金魚ちょうちんは、和紙と竹ひごで作られた提灯を柳井の特産品「柳井縞」の染料で着色していた。電灯の普及で姿を消した金魚ちょうちんが民芸品として復活したのは戦後。その立役者の一人が小学校の教員をしていた河村信男さん。

当時、公民館の館長に金魚ちょうちんの普及をお願いされた信男さんは、大人はもちろん子どもやお年寄りも作ることができる場を設け、指導にあたっていた。そんな信男さんの人柄について妻の政枝さんは、「学校の先生をしていたころから子どもにも親御さんにも慕われる人でした。教職を引退して金魚ちょうちん作りを地域の人に教えていた時も、変わらなかったですね」と話す。そんな彼が思い描いた夢は「柳井を金魚ちょうちんの町にしたい」ということ。だからこそ商売としてではなく伝道者として製作に専念していた。

「一度主人に、周りからあんまり言われるもんだから〈金魚ちょうちんの〉特許を取ったら？と言われるんだけど、どう思う？と相談したんです。するとあまり怒らない主人が『そんなことのためにしてるんじゃない！』と激怒してしばらく口も聞いてくれませんでした。彼は心から柳井と金魚ちょうちんを愛していたんですね」と政枝さんは当時を振り返る。政枝さんは信男さんが他界して1年後に開いたこの工房で、金魚ちょうちんづくり体験講座などを通じて夫が柳井に残した金魚ちょうちんの文化を伝え続けている。

工房に入ってすぐの談話スペースには河村信男さんの写真や県や市からの賞状が飾られている。
政枝さんや彼女の息子や孫も金魚ちょうちんづくりに携わり、伝統を後世につないでいる。

金魚ちょうちんづくりを企業の地域貢献として採用

金魚ちょうちんづくりを地域貢献の一環として採用している「あさひ製菓」。
彼らはなぜ、この取り組みをどんな経緯で採用したのだろうか。

企業の地域貢献はさまざまだが、金魚ちょうちんづくりをその一環としているのは、「あさひ製菓」だけではないだろうか。あさひ製菓は山口県内に47店舗ある「果子乃季」や白壁の町にある「きじや」などを展開している和洋菓子店。

そんな地元の大手企業と金魚ちょうちんの関わりについて、製作を担当する民芸部の山本ノブ子さんに話を伺った。

「24年前になりますが、専務がこの金魚ちょうちんの伝統を残していきたいということで、周防大島町小松に住む上領芳宏さんのところへ習いに行ったのがきっかけです。上領さんは当時、金魚ちょうちん職人の五代目としてお一人で作られていたんですが、専務は彼の金魚ちょうちんに一目惚れしたんです。それで習いに行ったのはいいんですが、実際作り始めると想像以上に難しくて専務は脱落しました。私はなんとか認められて上領さんに六代目を名乗っても良いとお墨付きをいただき、それから会社の仕事と並行して金魚ちょうちんづくりをしています」。あさひ製菓には山本さんのほか、3名の職人がいるのだとか。

「金魚ちょうちんの伝統を先々に伝えていくためにも後継者は必要なので、社内の器用な方に声をかけて有志を募っています。ただ仕事の合間を縫っての作業となるのでなかなか難しい面もありますね。それでも金魚ちょうちん祭りの時期だけではなく、1年を通して柳井に金魚ちょうちんがあるようにできるよう、1体でも多くの金魚ちょうちんを作りたいと思います」と山本さんは話す。

［右ページ］あさひ製菓が展開する「果子乃季」の総本店は、天井から無数の金魚ちょうちんが下がっている。その空間を見るためにここを訪れる観光客も少なくない。製菓工場では山口銘菓『月でひろった卵』などのギフト商品から店頭で販売される生菓子までさまざまな和洋菓子が作られている。この時期は金魚をモチーフに取り入れた菓子も登場。［左ページ］山本さんのデスクの周りには製作中の金魚ちょうちんがお行儀よく並ぶ。「一つずつ手作りなので、それぞれで表情が違うんです。だから送り出す時は娘を嫁にやるような、そんな気持ちになるんですよ」と山本さん。

4

1

5

2

6

3

金魚ちょうちんの作り方

[1]涙型に組んだ竹ひごを2つ、円形の竹ひごを一つ用意し、それを組み上げてちょうちんの骨にする。[2]竹ひごに和紙を8面に分けて貼る。その時金魚のお腹となる部分から貼ると仕上がりがキレイに。[3]和紙を貼り終えたら口を貼る。目は和紙に最初に書いておくか、色を塗り終わってから貼り付ける。[4]白く残す部分にロウ付けをする。目の白目にもロウ付けを忘れずに。[5]着彩する。竹ひごにあたる部分はにじみやすいので、その部分の絵の具にだけ木工用ボンドを少し入れると良い。[6]尾ビレと胸ビレを付けて完成。尾ビレや胸ビレは先に着彩して置くと作業がスムーズに行える。

柳井の特産品
金魚ちょうちんの作り方

単純そうで難しい金魚ちょうちんづくり。
ポイントはロウ付けと目の間隔。

少しとぼけた表情がなんとも愛らしい金魚ちょうちん。素材は基本的に竹ひごと和紙といった簡素なもので、これは江戸末期から変わっていない。ただ当時は金魚の中にロウソクを入れていたので、今よりも胴の部分の穴や金魚の表情など現代との違いもある（P10写真を参照）。そこで今回はあさひ製菓の山本さんに金魚ちょうちんづくりのポイントを伺った。

「一番難しいのは金魚らしい膨らみを作ることです。和紙をピタッと貼ってしまうと角ばってしまうので曲線をイメージして貼り付けてください。また、ロウ付けは細く毛足の短い筆を選ぶと良いかもしれません。私は目を最初に描いて張りますが、後で貼り付ける際は間隔で表情が変わるので確認しながらすると良いですね」。金魚ちょうちんづくりは夏休みの工作にも取り入れられるようなので、親子でチャレンジしてみてはいかがだろう。

柳井に広がる金魚ちょうちん

住民や地元企業がつないだ金魚ちょうちんが柳井の町を泳ぐ。

現在、白壁の家屋が並ぶ柳井津を中心に、柳井市では金魚ちょうちんをさまざまな場所で見ることができる。これは「柳井を金魚ちょうちんの町にしたい」という河村信男さんの想いや、金魚ちょうちんの文化を後世まで伝えるためのあさひ製菓の活動が実を結んだから。もちろん、地元住民や企業だけでなく、市などの公共機関の活動も金魚ちょうちんの普及に一役かっている。

柳井金魚ちょうちん祭りを目前に控えた柳井の町では、祭りのための募金をお願いする市職員を見ることができた。白壁エリアにある店舗を一軒ずつ訪ね「今年もよろしくお願いします！」と市職員が言うと、皆、快く引き受けている。金魚ちょうちん祭りはそれほど歴史のある祭りではないが、柳井に住む人たちが試行錯誤しながら作り上げた祭りだ。だからこそ彼らは祭りを心から愛することができるのだろう。

「私も含め、柳井の方は本当に金魚ちょうちんを誇りとしています。近年では日本だけでなく、海外からもこの金魚ちょうちんを求めて柳井を訪れる方もいらっしゃいますので、その想いはより強くなっているのかもしれません。私たちも金魚ちょうちんを通じて柳井の魅力を多くの方に知ってもらえればと思います」と話すのは市職員の高杉さん。梅雨明け間近の蒸し暑い日に店々を訪れる高杉さんの表情は、とてもイキイキとしていた。

8月13日が本祭りだが、金魚ちょうちんは8月末まで、柳井の町の至るところで飾られている。この機会に、ぜひその幻想的な風景を心に焼き付けて欲しい。

江戸時代の面影を残す白壁の町並みに、金魚ちょうちんの赤がよく映える。7月下旬から祭りが終わるまでは夜になると金魚ちょうちんに明かりが灯り、より幻想的な風景を映し出してくれる。店先にならぶ金魚ちょうちんを愛でながら白壁の町を歩くのも風情があって良い。

今回の旅のメモ。

今回の旅で訪れたのはこちらです。

profile

第26回 柳井金魚ちょうちん祭り

柳井の民芸品である「金魚ちょうちん」をモチーフにした夏のイベントがこちら。1986年に町おこしの一環として柳井青年会議所が行った「ふるさとフェスタ」がその始まりで、開催20回目となる2011年に市外へのPRも兼ねて名称を「柳井金魚ちょうちん祭り」と変更、今年はその26回目となる。JR柳井駅から白壁の町並みまでの市街地一帯に飾られる金魚ちょうちんの数は約4000個。ちょうちんに照らされた街の風景は、記憶に残るワンシーンとなるはず。

［ 開催日 ］2017年8月13日
☎0820.22.2111（柳井市商工観光課）

access

金魚ちょうちん祭り会場まで

［公共交通機関で］山口宇部空港からリムジンバス山口宇部空港線新山口駅北口行きに乗車。
終点で下車し、JR新山口駅から山陽本線で柳井駅へ。
［車で］山口宇部空港から山口宇部道路、小郡道路を経由し山口南ICから山陽自動車道へ。熊毛ICを出て県道8号線を光市方面へ、県道63号線、県道22号線を経由し、柳井駅方面へ。約1時間30分。
※金魚ちょうちん祭り当日は会場付近が通行止めになっているため注意が必要。

more information

金魚ちょうちん祭りに関わるあれこれ

work shop

本家 河村信男工房

柳井市の郷土民芸品「金魚ちょうちん」復活の立役者の一人・河村信男さんの技術を今に伝えるこの工房は、信男さんの妻・政枝さんが切り盛りしている。ここではちょうちんの販売はもちろん、ちょうちん作り体験（1,080円・5号サイズ）も実施している。

山口県柳井市柳井津字古市495・1
☎0820.22.5956
［ 営 ］11:00～16:00　金曜定休

shop

木阪賞文堂 白壁店

明治27年創業、昭和初期に山口県東部から県中央部を中心に卸商として展開したこの文具店には、当時同盟国だったドイツ製の「日本大勝利鉛筆」の看板など貴重な資料を展示。店内には、金魚ちょうちんグッズがところ狭しと並んでいる。

山口県柳井市柳井津452
☎0820.22.0150
［ 営 ］10:00～17:00
www.sirakabe.com

shop

あさひ製菓株式会社

大正6年創業の和洋菓子製造店。展開する菓子店「果子乃季」は山口県内に47店舗あり、「月でひろった卵」など数々の山口銘菓を発信している。また果子乃季総本店では、ケーキ作りの教室など地域と交流する取り組みも積極的に展開。

山口県柳井市柳井5275
☎0820.22.0757（果子乃季 総本店）
［ 営 ］9:00～19:00
www.kasinoki.co.jp